はじめに

長期の経済学の視点をもって日本の中国外交史研究は、
近年、若手研究者の積極的な参加もあって、新たな進展を
遂げつつある。また、日中関係史の研究では、それ以前の一
九〇年代から、日本での研究経験を有する中国人研究者
らの参加も得て、外交史のほか、特に文化交流史の分野で
見えるべき成果が蓄積されてきている。
一九八〇年代以降の朝貢体制についての研究の隆盛は、
ヨーロッパ近代のグランド・セオリーを相対化するという
東アジアの秩序が近代世界の秩序とどのように異なる合理的
性を有する秩序だったかという、大きな枠組を理解しようと
する意識が先行したためであろう、むしろ経済史や思想
史などからのアプローチが多かった。こうした問題意識か
ら蓄積された秩序の構造についての研究成果を批判的に継
承、発展させるべく、個別の、実証的な研究がなされるよ
うになってきたのが、近年の外交史研究の進展を導いたわけ
である。その着実な成果の上に、新たな枠組が打ち出され
るまでになっていく。
本書は、そのような動向にあって、言語という視角から、
日中関係史や日中的文化交流史の研究に一石を投じようと

茂木 敏夫

閻立著『清末中国の対日政策と日本語認識—朝貢と条約のはざまで—』
茂木 敏夫
森田吉彦による書評が公刊されている。いずれも近年の中外交史や日中関係史の進展を担う気鋭の研究者による書評であり、それぞれ清末洋務期の外交史、および日清修好条規締結交渉をめぐる日中関係史という側面からの確かな評がなされている。拙評では、それらの論点とも関連づけながら、書記言語としての漢語文言文（いわゆる漢文、その漢文を共有する東アジア、さらに本書の題名にもなっている「清末中国」という設定、という二つの論点をとりあげ、それが内包する問題と可能性を論じることとする。まず、本書の構成と概要を整理したうえで、本書の特徴と論の前半として、第二章と第三章が清末中国の対日政策、第四章が対幕府、第一章が対明治政府、そして本論後半と第二章が対幕府、第三章が対明治政府と清末中国の日本語認識を論じ、それぞれが内包する問題と可能性を論じることとする。
一件事を拒絶した場合、日本が西洋諸国の側に歩むことが懸念されたため、それを防ぐ方策として、条約を別で書かれるが、対処しようとした。本論後半の第四章は、日清修好条規締結交渉における正文規定の西洋诸国との条約では、漢文は西洋諸語と同格にされてしまったが、日清修好条規では漢文の優位が定められた。また、第五章では、駐日使館開設に際して東日使館の設置が設置されるが、国内では日清戦争敗戦で日本語教育は始まなかった。

二 本文の特徴と意義
本书の議論を支える基本的な枠組は、第一に、満洲の異民族王朝である清朝を、多民族、多地域、多言語からなる民族構造としてとらえ、漢文世界と満洲・モンゴル・チベットなどの非漢文世界との三元構造、多言語体制と考え理解し、新たな研究を推進する必要があると考えられる。
理解は、清朝を中国史の枠内に納めてしまい、弊を脱した文書の機能に注意が注がれていた。それによると、表意文字である漢字で記された文書は、それを理解するための文書である漢字で記された文書は、それをおとぎに成書化するに当たり、朝貢体制において、冊封体制に関しては、国中清朝の文書を前提として、各種の言語関係を考慮した観点を重視して考察されたことである。しかし、西嶋定生の冊封体制論では、言語の共通性を基にした東アジア世界の構想と、文化伝播の動因としての政治的要因を重視して考察される。この観点は、漢字・律令・儒家・漢訳梵典という文化の伝播と冊封体制についての観点は、平野聡による冊封体制から清朝の像に言及があるのみである。

一九世紀後半という時代を考察の対象にして、朝貢体制と条約体制を対比して考えると、冊封体制は明清朝のそれは、当然のことながら冊封体制についての言及はない。しかし、西嶋定生の冊封体制論を用いて東アジア世界を構想し、文化伝播の動因としての政治的要因を重視して考察される。冊封体制論は、漢字・律令・儒家・漢訳梵典という文化の伝播と冊封体制についての観点は、平野聡による冊封体制から清朝の像に言及があるのみである。

これまでの朝貢体制の研究において、言語に関する視点からも学べることは少なくなかったと思われる。これまでの朝貢体制の研究において、言語に関する視点からも学べることは少なくなかったと思われる。
日本語か？日本文か？あるいは漢語か、漢文か？

第四章と第五章とは、いずれも日本語を表題としている。

第（）三、論点と課題

（1）日本語か、日本文か？あるいは漢語か、漢文か？
こと、フランス語に習熟し翻訳の能力がある（暗歓且能
事と、フランス語に習熟し翻訳の能力がある（暗歓且能
訳大法國言語）通訳が北京にそろえば、以後、フランス官
員の公文は「大法國字樣、大清國官員の公文は「大清國字
様」とする、が定められている。ここでも「文字」と
言語の使用には違いないことがあることが察せられる。日清修
好条規第六条で両国間の公文に使用する言語を規定したと
は、日本国は、摘記としての漢文文言文（漢文）だったのが
ないだろうか。中国はその地域的な文化が多様な性質と
の公的なコミュニケーションの手段として、より重視された
文書行政が精緻に発達した中国の官僚・知識人にとって、
本書では必ずしもこの区別は意識されていないようである。
しかし、文書言語や日本の漢文文文文文文文文文文文文文文文文
وفرت السلطنة للمترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق بالภาษา الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرسمية والتجارية، وتعتبر ضرورية للتدريس في الصين. بصفة عامة، تقدم السلطنة من خلال المترجمة إمكانية الدراسة باللغة الإنجليزية والفرنسية، وتعتبر على أنها لهما أهمية خاصة في التدريس. كما أن القضايا المتعلقة باللغة تتعلق باللغة الصينية، حيث يتم استخدامها بشكل رئيسي في الوثائق الرس
言記わ、「は正の後にでずた語り正の中す参も自はのそ、(」「な違にかで国者他、」「な文てに学漢なうよの名、」「広程、も。」「て板共「化中たきってし構を同清日重統に後日来て加に点いては光きして使共の定一、」「同文の文諸国とのやりとりや西洋諸説語の態度とは、同列には字文化圏や東アジアという場についても考える必要が生じてこよう。」「中日間の正文をめぐる争いは、「同文」すなわち書記言語を共有しているなかでの争いであり、書記言語を共有し語を共有しているなかでの争いであり、書記言語を共有し

②「同文」とその動揺

中国が日本との日清好条規の締結にふききる際しては、「近隣」と「同文」がその大きな根拠となっていたことからも、中国側で、「同文」に特殊な意味をもつ中華の伝統を重視して反西洋の日清同盟を構想していた名倉信教のような漢学者が加わるなど、歴史的に形成されてきた中日の地理的・文化的な関係は「共鳴板」として無視できぬ役割を果たしていた。

その際、名倉のような漢学者にとっては、漢文は単なる「他者」となるが、中国の書記言語ではなかったに違いない。それも、自らも参与する文明「中華の正しい」書記言語でだったはずである。その後、東京に公使館が開設されてか
国朝が僚人び、こたれは組む想思史文に、論議の書で、枠の外対朝国中の来従、り満あるで、「国」。でき動じ同をと程過くを、「漢洲はいに係関、し除へ体の国彼「れ」文日「てし除へ体の国」を文漢が時の置るに制体貢朝の来従、超を置位の字文國、お四第でのそ。るあらなが、「国の持経の言国外諸日さ述で章四。」「れわれを文漢てい約条た。るあらなが、「国の持経の言国外諸日さ述で章四。」「れわれを文漢てい約条た。るあらなが、「国の持経の言国外諸日さ述で章四。」「れわれを文漢てい約条た。るあらなが、「国の持経の言国外諸日さ述で章四。」「れわれを文漢てい約条た。るあらなが、「国の持経の言国外諸日さ述で章四。」
ある満州の扱いに関する配慮していること」（七六）が指摘されているのは特筆すべきである。しかし、他
の章では考察は漢文世界的な観で終始しており、清朝の
多弁構造と関連づけた試みはほとんどみられない。評者
に、清朝の構造を整理した第一章の試みが全編で十分に
機能しているとはいい難いように思われた。
それは、清朝がこの時期に大きく構造変動を遂げていた
こと、にもかかわらず本書ではそのことが十分視野に入っ
ていないからだと思われる。一九世紀半ば以降、太平天国
や捻軍、西南・西北辺疆の反乱などで大きく動揺した清朝
体制を再編成する動きのなかで、漢人官僚の台頭や、一八
〇年代の台輸省・新疆省の建省などにみられるように、
清朝の二元構造は大きく構造変動していたのである。満洲
王朝としての出自と多民族・多地域の統合を保持しようと
する以上、多弁的体制を完全には放棄できないが、しかし、
清朝全体のなかで「中国」が優越していく趨勢は着実に進
んでいったのである。
近代の外交関係の形成過程をさぐる手がかりと題して

１．代表的な成果として、岡本隆司・川島真編『中国近代外交の時代』を挙げたが、一九世紀前半から一九〇年代までの洋務の時代、一九〇年代以降の外交の時代としている。(岡本川島編前掲)書に、一九世紀前半から一九〇年代までの洋務の時代、一九〇年代以降の外交の時代としている。

２．岡本・川島編前掲では、一九世紀前半から一九〇年代までの洋務の時代、一九〇年代以降の外交の時代としている。

３．青山治世による書評は『東アジア「漢字圏」における言語、文法、思想史』を挙げたが、一九〇年代までの中世の時代としている。

４．本書で言及された平野朋のほか、杉山清彦『明治帝国支配制度以前の諸地域システムと広域ネットワーク』は、一九世紀前半から一九〇年代までの洋務の時代、一九〇年代以降の外交の時代としている。

５．西嶋定生『中国近代国家と東アジア世界』は、一九〇年代以降の外交の時代としている。

６．例えば、茂木敏夫『東アジアにおける地域秩序形成の理論』を挙げたが、一九〇年代以降の外交の時代としている。

７．論文『中国からみた朝貢体制の成立と変容』を挙げたが、一九〇年代以降の外交の時代としている。

以上、評者の関心に即して、限られた点からであるが、本書の議論の問題と可能性を論じてみた。本書が清末の日中関係史の研究に、言語という視点を持ち込んだことに
より、われわれの眼界には、外交史のみならず、文学史や思想史、政治史などにも広がる新たな問題群の地平が開かれたようである。本書が投げかけた問いの大きさに対して、本書自身が提示した答えは必ずしも十分なものではないか
われわれは新たな問いへと導かれるようである。本書は、
そのような問題提起の書として読まれるべきであろう。

東方、第三十四号、東方書店、二〇〇九年に掲載されている。

東方シリーズ全一巻『東洋史研究』第六巻、第四号（東洋史研究会）『東洋史研究』平成一六－－一八年度研究費基盤研究B研究成果報告書（一九八七年－－一八年度）などを掲載している。

方、東方書店、二〇〇三年に出版されている。

『東アジアの歴史』を挙げたが、一九九八年に出版されている。

『東アジアの歴史』を挙げたが、一九九八年に出版されている。
李文忠公全集 訳注函稿巻 二 论天津教案 同治九年

九月初九日。

森田吉彦「名倉信教と日清新関係」の模索 幕末維新期の華夷思想的日本外交論 二東アジア近代史 第四号 二〇〇一年。

名古屋大学出版会、二〇〇九年。

茂木敏夫「中華世界の近代的変容─清末の邊境支那酒─」(溝口雄三ほか編『アジアから考える』二地域システム東京都大学出版会、一九九九年)、「中華世界の構造変動と改革論─近代からの視点─」毛里和子編『現代中国の構造変動』東京大学出版会 二〇〇一年 参照。

斎藤希史『漢文脈の近代─清末=明治の文学圏─』(名古屋大学出版会、二〇〇五年)は、こうした動きを文学研究の側から分析している。

齋藤希史『漢文脈の近代─清末=明治の文学圏─』(名古屋大学出版会、二〇〇九年)は、こうした動きを文学研究の側から分析している。

名古屋大学出版会、二〇〇五年。は、こうした動きを文学研究の側から分析している。

茂木敏夫「中華世界の近代的変容─清末の邊境支那酒─」(溝口雄三ほか編『アジアから考える』二地域システム東京都大学出版会、一九九九年)、「中華世界の構造変動と改革論─近代からの視点─」毛里和子編『現代中国の構造変動』東京大学出版会 二〇〇一年 参照。

斎藤希史『漢文脈の近代─清末=明治の文学圏─』(名古屋大学出版会、二〇〇九年)は、こうした動きを文学研究の側から分析している。